



A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

野菊の墓 <small>のぎくはか</small> ……………	5
浜菊 <small>はまぎく</small> ……………	91
守の家 <small>もりいえ</small> ……………	119
姪子 <small>めいご</small> ……………	129
奈々子 <small>ななこ</small> ……………	145

野菊の墓のぎくはか

後の月のち つぎという時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訳わけとは思うが何分なにぶんにも忘れることが出来ない。最早もとう十年余も過去よつた昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今猶昨日なほの如く、其時そのの事を考えてると、全く当時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態ありさまで、忘れようと思ふこともないではないが、寧ろ繰返し繰返し、考えては、夢幻的の興味を貪むさぼつて居る事が多い、そんな訳から一寸物ちよつとに書いて置こうかという気になつたのである。

僕の家というは、松戸から二里許下つて、矢切やぎりの渡わたしを東へ渡り、小高い岡の上で矢張矢切村と云つてる所。矢切の斎藤と云えば、此界限このかいわいでの旧家で、里見の崩れが二三人茲ここへ落おちて百姓になつた内の一人が斎藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎しいの樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森いもりで村じゅうから羨うらやましがられて居る。昔から何程なにほど暴風あらしが吹いても、この椎森しいもりのために、僕の家許ばかりは家根やねを剥はがれた事は只ただの一

度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それが又煤またすすやら垢あかやらで何の木か見別みわけがつかぬ位、奥の間の最も煙けぶりに遠いところでも、天井板が丸で油炭あぶらずみで塗つた様に、板の木目もくめも判わからぬ程黒い。それでも建ちは割合に高く、簡単な欄間らんまもあり銅の釘隠くぎかくしなども打つてある。其釘隠が馬鹿に大きい雁がんであつた。勿論一寸見たのでは木か金かねかも知れないほど古びている。

僕の母なども先祖の言い伝つたえだからといって、此戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢ひとまされていた。其頃母は血の道で久しく煩わづらつて居られ、黒塗的な奥の一間ひとまがいつも母の病褥びようじよくとなつて居た。其次の十畳の間の南隅みなみすみに、二畳の小坐敷こざしきがある。僕が居ない時は機織場はたおりばで、僕が居る内は僕の読書室よみかみむにしていた。手摺てすり窓まじの障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮さへつて北を掩おほうている。

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁えんの従妹いとこになつて居る、民子たみこという女の児こが仕事の手伝てやら母の看護かんごやらに来て居つた。僕が今忘れることが出来ないというのは、其民子そのと僕との関係である。其関係と云つて

も、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業した許ばかりで十五歳、月を数えると十三歳何ヶ月という頃、民子は十七だけれどそれも生うまれが晩おそいから、十五と少しにしかならない。瘦やせぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味あかみをおんだ、誠に光沢つやの好いい児であつた。いつでも活々いきいきとして元気がよく、其癖そのくせ気は弱くて憎にくげ気の少しもない児であつた。

勿論もちろん僕とは大の仲好しで、坐敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の坐敷へ這入はいつてくる、私も本が読よみたいの手習てならいがしたいのと言いう、たまにはハタキの柄えで僕の背中を突いたり、僕の耳を摘つまんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる、

「又また民たみやは政まさの所へ這入はいつてるナ。コラアさつさと掃除をやつてしまえ。」

これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻しばしばりに小言を云うけれど、其実母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言も極きまつてゐる。

「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女一人前いちにんまえとして嫁にゆかれません」

此頃この僕に一点の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考かんがえなどは少しも無かつたに相違ない。併しかし母がよく小言を云うにも拘かわらず、民子は猶朝なおあの御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度たびに、急いで這入つて来て、本を見せろの筆を借かせのと云つては暫しばく遊あそんでいる。其間ひまにも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達たした帰りには、屹度きつと僕の所へ這入つてくる、僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかナと思ひ出すと、ふらふらツと書室を出る。民子を見にゆ